

OED における「心理受動文+by」構文と Henry Bradley

竹田津進

I. 序

Please, surprise, worry といった心理動詞の受動文（以下心理受動文）は、形容詞扱いされたり、あるいは準受動文（semi-passive）扱いされ、動作主をあらわす前置詞として一般的に *by* 以外の前置詞（*with, at, about* など）をとるとされてきた（Svartvik 1966: § 5.81; Close 1975: § 11.3; Quirk et al. 1985: § 3.76 など）。

I was a bit surprised at her behaviour.

We were all worried about the complication. (Quirk et al.: § 3.76)

現代英語では動作主を示す *by* は増加傾向にあり、辞書や語法書にも *by* についての記述が増えてきており、「心理受動文+*by*」構文は標準的の語法として認知されてきていると思われる。

You're going to be surprised by your mother's appearance.

(T. Williams, 1944, *The Glass Menagerie*, xi)

William's mother was worried by his lateness.

(*National Geographic*, July, 1992, p.118)

OED が編集された19世紀後半から20世紀初頭にかけて、「心理受動文+by」構文は当然標準的語法とは見なされなかったと思われるが、*OED* の編集者たちはこの構文をどう扱ったのだろうか。Taketazu (1999) で、Onions の規範文法的傾向を論じ、Henry Bradley の規範文法からの乖離を示唆したが、本稿では、Bradley が *OED* 編集の際、当時おそらく非標準的語法であった「心理受動文+by」構文をどう扱ったかを考察する。まず2節で、*OED* における、心理受動文がとる前置詞についての記述を検証する。さらに *OED* の CD-ROM を使って「心理受動文+by」構文を検索し、Bradley が他の編集者よりもこの構文の引用文を多く採用していること、また定義の記述をするときにもより多く使っていることを示す。3節では、大学教育を受けず民間会社に勤め、教員歴のない独学の学者であった Bradley の言語観や文法観は、規範文法主義からはかけ離れていたのではないかという仮説を提示する。4節では、辞書編集者の言語観や個性、見識が、辞書編集に影響を及ぼすのではないかということを、Johnson 博士の辞書を例に引き論ずる。

II. 「心理受動文+by」構文

1. 心理受動文と前置詞

この節では、受動文が *by* 以外の前置詞をとるとされる心理動詞を考察する。扱う動詞は *alarm, amaze, amuse, annoy, astonish, bewilder, bother, chagrin, confuse, deject, delight, depress, disappoint, disgust, dismay, displease, excite, frighten, grieve, interest, offend, overwhelm, perplex, please, puzzle, satisfy, scare, shock, startle, stun, surprise, terrify, vex, worry* といったごく一般的な心理動詞である。¹⁾ なお、過去分詞形が形容詞扱いされ、別の見出し語になっているものも考察に含めた。

OED 初版の編集者は Murray (1837-1915), Bradley (1845-1923), Craigie (1867-1957), Onions (1873-1965) の4人である。上記の動詞の編集者

は以下のようなになる。²⁾

Murray: *alarm, amaze, amuse, annoy, astonish, bewilder, bother, chagrin, confuse, deject, delight, depress, disappoint, disgust, dismay, displease, interest, offend, overwhelm, perplex, please, puzzle, terrify*

Bradley: *excite, frighten, grieve, satisfy, scare, shock, startle, stun*

Craigie: *vex, worry*

Onions: *surprise*

以下、個々の動詞の心理的意味の定義部分の記述、およびその意味を例証する引用文を検討する。例えば、動詞 *please* の心理用法の定義と用法、および引用文は以下のとおりである。*Please* が「喜ぶ」という意味の受動文として使われ、前置詞として *with* をとるという記述があり、*with* を伴う引用文（近代英語以降のみをあげた）があげられている。

Please 4.a. Passive. To be pleased: To be gratified, delighted, or agreeably satisfied. Const. *with*.

1535 Coverdale Ps. 1[i]. 19 Then shalt thou be pleased with the sacrifice of rightuousnesse.

1718 Free-thinker No.61. 40 Every One is pleased with such an Occasion of shewing the Superiority of his Understanding.

1850 McCosh Div. Govt. II. ii. (1874) 213 Nor can God be pleased with the perverted adoration.

OED における、上に挙げた心理動詞の定義と用法の記述、及び引用文を精査すると、受動文の動作主をあらわす前置詞は以下のとおりである。太字の前置詞は、定義・用法の記述の中で共起すると記述されているもの、

括弧内の前置詞は定義中には共起するという記述はないが、定義を例証するための引用文中に使われているものである。——は共起する前置詞の記述もなく、引用文にも前置詞が使われていないことを示す。*は廃用をあらわす。

<i>alarm</i>	(<i>at, by, with</i>)
<i>amaze</i>	(<i>at, with</i>)
<i>amuse</i>	<i>with, by, at</i>
<i>annoy</i>	*<i>after, *for, *of</i> , (<i>with</i>)
<i>astonish</i>	(<i>at, of, with</i>)
<i>bewilder</i>	——
<i>bother</i>	(<i>with</i>)
<i>chagrin</i>	(<i>at, by</i>)
<i>confuse</i>	——
<i>deject</i>	(<i>by</i>)
<i>delight</i>	<i>with, at, *in</i>
<i>depress</i>	(<i>by</i>)
<i>disappoint</i>	<i>in, with, *of</i>
<i>disgust</i>	<i>from, of, against</i> , (<i>at, with</i>)
<i>dismay</i>	——
<i>displease</i>	<i>with, at, *of, *against</i>
<i>excite</i>	——
<i>frighten</i>	<i>at, of, for</i> , (<i>by</i>)
<i>grieve</i>	<i>with</i> , (<i>at, by</i>)
<i>interest</i>	(<i>about, in, by</i>)
<i>offend</i>	<i>with, at</i>
<i>overwhelm</i>	(<i>with</i>)
<i>perplex</i>	(<i>with</i>)

<i>please</i>	with
<i>puzzle</i>	(<i>by</i>)
<i>satisfy</i>	with, at, of, *in, (<i>by</i>)
<i>scare</i>	(<i>at, by</i>)
<i>shock</i>	at, (<i>by</i>)
<i>startle</i>	(<i>with</i>)
<i>stun</i>	(<i>by, with</i>)
<i>surprise</i>	at, *with
<i>terrify</i>	—————
<i>vex</i>	at, with
<i>worry</i>	(<i>about, by, with</i>)

受動文の前置詞として *by* が使われるという記述は *amuse* にしかない。その記述の仕方も, “to be amused *with* a toy or whimsical person, *by* a story told me, *at* an incident, the self-complacency of another” とあり, *by* の使用は限定されている。しかも他の動詞と違って, この用法を例証する引用文は一つもあげられていない。以上のことから, 「心理受動文+*by*」構文は, 当時標準語法とは認められていなかったと言ってもよいであろう。

注目すべきは, 定義・用法の記述中に *by* と共起するという記述はなくても, それらの動詞の定義を例証するための引用文として, *by* の使われている用例が採用されていることである。それらは以下の13例で, Bradley に6例, Murray に6例と, Craigie に1例あり, Bradley は編集した8つの動詞のうち, 6つに *by* を使った引用文をあげていて, 4人の編集者の中では相対的に一番多く使っている。

alarm v.5 1653 The King was again Alarum'd by the Protestation.

chagrin v.2 1878 Surprised and chagrined by the coldness of her manner.

deject v.5 1625 The king was much dejected by a Lettre received from Denmark.

depress v.6 1806 We came ... amidst rain and wind, and depressed by ill-forebodings.

frighten v.a 1883 In fearing that England would go into schism the pope was frightened by a shadow.

grieve v. 5 1841 He was grieved by the corrupt speech of his son.

interest v.5 1791 She had been too much interested by the events of the moment.

puzzle v. 1870 Like a schoolmaster puzzled by hard sum.

satisfy v.7 1611 If any doubt hereof, he may be satisfied by examples enough.

scare v.1 1671 When they should find themselves more skarred than hurt by His Threats.

shock v.4 1849 Every moderate man was shocked by the insolence, cruelty, and perfidy with which the nonconformists were treated.

stun v.2 1802 Lady Catherine was stunned by this distinct refusal.

worry v.7 1867 Men when they are worried by fears...become suspicious.

2. 「心理受動文+by」構文の引用文

この節では、*OED* の CD-ROM を使い、「心理受動文+by」構文を含む引用文を搜した。この構文の引用文は、心理動詞の「過去分詞形+by」をテキスト検索(text-search)することによって得られる。過去分詞と *by* との間に他の語句が挿入されている可能性もあるので、過去分詞のみの検索もした。こうして得られた用例のうち以下のものは除いた。すなわち、心理的用法でないもの、主語が「人」でないもの(但し擬人化されたものは含めた)、不適切な連語、併置された別の動詞によって *by* が導かれている

ものなどである。³⁾ 同一引用文が別々の編集者による 2 つの見出し語に使われている場合や,⁴⁾ 一つの引用文中に 2 つの心理動詞が併置されているときは、2 つの用例として数えた。⁵⁾ 引用文は 17 世紀以降、特に近代英語後期頃のものを対象にしたが、これは、英文法が陸続と書かれ、規範文法的意識が芽生え定着してくるのがこの時期ということによる。⁶⁾ 当然のことながら、Burchfield 編集の *Supplement* (1972-86) に採録されている引用文は除いている。こうしてふるいにかけて残った引用文が例証する見出し語によって、どの編集者の引用文かが判明する。

検索と用例吟味の結果は Appendix I に掲載した表にある。(引用文例は一部 Appendix II に掲載している。) 編集ページ数が編集者間で異なるので,⁷⁾ 比較のため 1,000 ページ当りの頻度を括弧内に示した。表から、Bradley が採用した「心理受動文+by」構文の引用文が他の編集者よりかなり多いことがわかる。特に、*frighten*, *please*, *surprise* など頻出する動詞で、しかも *by* 以外の前置詞 (*of*, *with*, *at* など) との結び付きが、いわばイディオムのとでもいえるほどに強い動詞の受動文が *by* をとっている用例数は、他の編集者と比べて断然多い。

3. 「心理受動文+by」構文を使った定義の記述

Bradley は「心理受動文+by」構文を引用文として採用しているだけでなく、見出し語の定義を記述する際にもよく使っている。以下の *excitement*, *fear-struck*, *get over*, *glad of*, *grimalkined*, *mind*, *scare*, *shade*, *weak* の 9 例である。

excitement 2c.: In recent use: The condition of being mentally excited, whether by pleasurable or painful emotion.

fear-struck: struck with or overwhelmed by fear.

get over: to cease to be troubled or surprised by.

glad of (c): joyful account of, delighted or pleased by (an event, a

state of things)

grimalkined pa. pple.: (nonce-wd.). vexed by a 'grimalkin'.

mind v.8a.: (Not) to object to, be troubled or annoyed by, dislike
(something proposed, something offered to one, etc.)

scare v.3: To take a scare (see *scare* n.2); to be alarmed by rumours
or the like.

shade n.6c: Orig., in humourous invocation of the spirit of a deceased
person, as likely to be horrified or amazed by some action or
occurrence.

weak a. & n.: Hence allusively in *weaker brethren* ... who are in
danger of being shocked by extreme statements of principle or
policy.

Bradley 以外では、Murray に 7 例、Craigie に 3 例、Onions に 2 例ある
が、⁸⁾ ここでも Bradley が目立っている。

特に、*glad of* (c) の定義は、以下の *glad of* (a) と比べてみると、目
的語の違いによって *by* と *with* の使い分けをしていることがわかる。

glad of (a): make happy or joyful, delighted or pleased with (an
object possessed) (obs.)

Bradley は、*pleased by* は前置詞の目的語次第では正用法である、と言っ
ていることになるわけで、2.1 節にあげた *please* の定義との違いは明らか
かである。

以上考察してきたことから、Bradley は 4 人の編集者の中では一番「心理受動文 + *by*」構文を引用文として採用しているし、また見出し語の定義を記述する際にも使っていることが明らかとなった。このことは、当時標準的語法とは見なされなかった「心理受動文 + *by*」構文に対し、Bradley

は他の編集者より寛容で容認的であり、その引用文の採用に積極的でさえあったということを示唆している。

正用法とは見なされていなかった語法に対する、Bradley の寛容かつ容認的な姿勢はどう説明したらよいのであろうか。Onions には非標準的の語法を排除しようとする規範文法的傾向が強かったのではないかということはすでに述べたが、Bradley は逆に、規範文法には距離をおき、非標準的の語法に対して受容的であったと考えれば、説明できるのではないだろうか。3 節では、Bradley の学歴や職歴が、彼の言語観や文法観に影響を及ぼしたのではないかという仮説を提示する。

III. Bradley の経歴と言語観

Onions の規範文法主義は、大学教育を受け、学校教師として勤め、文法書を書く中で強まったのではないかとすでに論じた。Bradley (1845-1923) の経歴(松浪他 1101; 佐々木・木原 32-33など参照)は、Onions のそれとは好対照をなしている。Bradley は Derbyshire 州、Chesterfield の grammar school で教育を受けた他は、すべて独学の学者であった。健康に勝れなかったため進学は断念し、18歳で Sheffield の刃物会社に勤め始め、通信文係を担当した。そこでの20年間に外国の顧客との通信事務に従事しつつ、職務上の必要性和自己の興味関心から独学でドイツ語、フランス語、スペイン語をはじめ、ラテン語やヘブライ語にまで精通したと言われる。その間、地元紙 *Sheffield Independent* に論文を投稿したり、Philological and Linguistic Society で研究発表をしている。1884年一家をあげて London に上京、本格的に執筆活動に入った。同年 *OED* の第1分冊 (*A-Ant*) が出版されたとき、Bradley の書いた書評が *OED* の主任編集者 James Murray に高く評価され、*OED* の編集に関わるようになった。さらに1887年には Murray に次ぐ二番目の編集者に任命された。

大学教育を受けず、周囲に影響を受けやすい多感な年頃である10代後半

から会社勤めをした Bradley は、Yorkshire 方言や非標準的語法の混じった英語に日常接し、非標準的な英語に順応し、理解を示していったのではないか。また外国との通信事務に携わり、おそらく外国人の非文法的な語法にも遭遇したりして、英語の非標準的用法に対し寛容になり、受容するようになっていったのではないか。高等教育を受けず、教師としての経歴もない、独学の学者としての Bradley は、文法的規範主義からは遠い存在であったのではないだろうか。

Bradley は、奇しくも Onions が *An Advanced English Syntax* を出版した同じ1904年、59歳の時に名著の誉高い *The Making of English* を著している。規範的記述を含む Onions の文法書に対し、これは英語の史の変遷を扱った書であり、その中で非標準的語法から標準的語法への変化、あるいは標準的語法の衰退というような言語変化を当然のこと、あるいは不可避のこととしてとらえている。例えば、Bradley の言語観をよくあらわすと思われる次のような箇所がある。

Now this is obviously an instance of the famous principle of 'survival of the fittest'. (p.24)

A considerable amount of new grammatical material has been introduced, to serve the needs of expression in cases where the old machinery has become inefficient through phonetic change and other causes, or where it was from the beginning inadequate for its purpose. (p.36)

The analogous passive forms, as in 'the house is being built', 'he was being taught to ride', were hardly known till near the end of the eighteenth century, and long afterwards they were condemned by sticklers for grammatical correctness. Yet the innovation was clearly needed ... the language has found means for representing shades of signification which had previously no accurate expres-

sion. (p.47)

24ページの記述は形態論に関するものであるが、「適者生存」の法則が言語変化に働くということであるから、規範的な標準的語法よりも、破格表現であっても言語社会の実態に即していれば、それが標準的語法として生き残るといふことであろう。36ページには、標準的用法が不適切になった場合、新しい用法が生まれるという記述がある。47ページの受動進行形の記述は、規範的用法に執着する文法学者に対する揶揄とさえ受け取れる。

Bradley には *Encyclopaedia Britannica* (1910, vol.xxv, pp.207-10) への寄稿論文“Slang”（「俗語」）がある（1928：145-56に所収）。一般に俗語は言語の正用法の周辺に位置すると考えられ、正当な扱いを受けず蔑視されてきたきらいがある（Baugh and Cable 1993: 306）。しかし、Bradley は、この5,000語にも及ぶ論文の中で、俗語を言語の正当なる一要素と考え、言語科学の対象として分析している。俗語は非標準語彙であったが、標準語彙に入って来たものもあると言うように（Bradley 1928: 145, 155）、俗語を非標準から標準へという変化の中でとらえている。こういった俗語に対する姿勢から判断すると、Bradley は非標準的語法に対して偏見をもたず、むしろ寛容であり理解を示したと見てよいのではないか。

これまで見たような Bradley の非標準的語法への理解、容認という文法的規範主義からの乖離が、OED の編集の際、引用文の採択や定義の記述に影響を与えたのではないであろうか。⁹⁾

IV. Johnson 博士の個性的辞書編集

たとえ科学的かつ客観的な辞書編集をめざしても、編集者の個性や見識が、語の定義の記述や引用文の採択においてあらわれてくるのは、編集者なりの言語観や辞書観を持ち、人生観や人間観がある限り避けられないことのように思われる。たとえば、Dr. Samuel Johnson の辞書は博士の個性

が色濃く出ていることで知られている。

まず語の定義においては、「Johnson の人間味の一端を示す有名な定義」(林 1968 : 1) のされた語がある。「カラス麦」は「イングランドでは馬に与えるが、スコットランドでは人を養う穀物」とあり、博士のスコットランド嫌いをあらわしていたり、また「辞書編集者」は「せわしく語の起源をたどり、語の意味をくわしく述べる無害の下働き」というような、ユーモアや皮肉のこもった自嘲とも取れる定義もされている。¹⁰⁾

引用文に関しても、博士独自の方針と見識をもって採用の判断を下している。単に、単語の意味を例証するためだけでなく、「学問・文学その他それぞれの分野において模範となるよう引用例文を集めるようにところがけた」り(永嶋 1983 : 207)、Johnson 博士の伝記を著した Boswell によれば、「健全な宗教と道徳を危うくするおそれのある作家の文章は使用しなかった」(今里・土屋 1985 : 61)。これが典型的にあらわれているのが、実質的な改訂版とされる第4版においてである。

第4版では宗教色の強い引用文が多数採択されている。第4版の1巻と2巻の一部を通じて聖書から広く引用したり、17世紀の国教会擁護者やピューリタンに対抗する王党員達からの引用が多数されている (Reddick 1990: 141-42)。次の引用文を見てみよう。

O Lord, make haste to help me. *Psalms*. (HELP, v. a. “1. To assist; to support; to aid.”)

God himself is with us for our captain. *Chron*. (HIMSELF, pron. “2. It is added to a personal pronoun or noun, by way of emphatical discrimination.”) (Reddick: 141)

これらの引用文が *help* や *himself* を例証するのに、言語的に最適な引用文でも、この引用文を使わなければこれらの語の例証が難しくなるというような引用文とも思えない。これらの語を例証するのが第一義の引用文と

いうより、聖書からの引用のための引用文だと言ってもよいであろう。

V. 結 語

Johnson 博士が単独で、自分の思いのまま編集した博士独自の辞書ほどではないにせよ、編集者の言語観や見識、個性が、定義の記述や引用文の採択に反映されるということは、OED についても言えるのではないか。もし規範文法主義の傾向が強い編集者であれば、非標準的の語法を引用文として採用することや定義の記述に使うことに抵抗を覚えたであろうし、逆に規範文法主義の弱い編集者なら躊躇せず、むしろ積極的であった可能性もある。規範文法主義の弱かったと思われる Bradley が、非標準的の語法であった「心理受動文+by」構文に対し寛容であり、それを含む引用文の採択や、それを使って語の定義を記述するのに積極的であったとしても首肯できるのである。¹¹⁾

注

- 1) なお、「心理受動文+by」構文の引用文が OED on CD-ROM のテキスト検索で見つからない動詞 (*appall, concern, content, thrill* など) は考察の対象から除いた。
- 2) OED (初版) の編集者の編集項目は以下のとおり (OED: xvii-xix)。
 - Murray: A, B, C, D, H, I, J, K, O, P, T
 - Bradley: E, F, G, L, M, S-Sh, St, W-We
 - Craigie: N, Q, R, Si-Sq, U, V, Wo-Wy, Supplement: L-R, U-Z
 - Onions: Su-Sz, Wh-Wo, XYZ, Supplement: A-K, S, T
- 3) 1860年の引用文は非心理的意味のもの、1865年のものは主語が「人」でないもの、1705年の引用文は不適切な連語のものである。1847年の例では、by は *drum* に導かれたと考えられる。
 - 1860 A man is stunned by a blow with a stick on the head. He becomes unconscious.
 - 1865 An unfastidious taste is not offended by its style.
 - 1705 Her Majesty hath been ... pleased, by Writ, to Call [him] to the House

of Lords.

1847 Small children are likely to be worried and drummed into apathy by dogmatic catechisms.

- 4) 1749 Fielding *Tom Jones* iii. vi. Surfeited with the sweets of marriage, or disgusted by its bitters が, Murray 編集の *bitter* a. & n. と Onions 編集の *sweet* n. の2つの見出し語の引用文として採用されているが, こういう例がいくつかある。
- 5) 例えば, 1712 we should take delight in being terrified or dejected by a Description は, *terrified, dejected* のそれぞれの用例と見なした。
- 6) 英語で書かれた最も古い英文法書は William Bullokar の *Bref Grammar for English* (1586) とされる。さらに, 当時広く人気を博した文法書に, Joseph Priestly の *The Rudiments of English Grammar* (1761), Robert Lowth の *A Short Introduction to English Grammar* (1762) などがある。特に Lindley Murray の *English Grammar* (1795) は「1850年までに, 控えめに見積もっても200版を重ね, 部数も1500万ないし2000万部出たとされる。」(渡部 1975: 457)。
- 7) 4人の編集者の編集ページ数は次のとおりである。Murray 7,207ページ, Bradley 4,590ページ, Craigie 3,242 (内 Supplement 210) ページ, Onions 1,395 (内 Supplement 657) ページ。
- 8) Murray は *alarmed, awe-struck, despond, distract(ed), kick* の “to get a kick out of (something)”, *tedious, thought-bewildered* の7例, Craigie は *spirit, squeamish, unagitated*, の3例, Onions は *sunning, surfeit* の2例である。
- 9) ここで Murray と Craigie の学歴や職歴と規範文法主義の関係について触れておかなければならない。Murray は Bradley と同じく独学の学者であったが, 教師として長年の経験があった(佐々木・木原 1995: 247-48)。一方 Craigie は大学教育を受けた学者ではあったが, 教師としての経歴はない(佐々木・木原 1995: 60)。Murray と Craigie は規範主義の程度においては Bradley と Onions の間に位置すると推測できよう。さらに言えば, Craigie は *by* の使用を認めている動詞 (*nettle* v.2b. In *pa. pple*. Irritated, vexed, provoked, annoyed. Const. *at, by, with, etc.*) があるということ, 表の数値が Bradley のそれに近いということから, 規範主義の程度においては Bradley に近いといえるのではないか。これは, Craigie は英語学者であると同時にスカンジナビア語の研究者であったということや, Murray や Bradley よりもおよそ一代後の人であったということも関係するかもしれない。Murray の数値が Onions のそれより低いのは, Onions も Murray より一代後の人であり, *OED* の編集が, Murray が手掛けた1880年頃から Onions の締めくくった1930年頃にかけて半世紀にも渡り, その間にも言語変化 (*by* の増加) が進行していたことに起因するのではないだろうか。
- 10) ‘Oats’: A grain, which in England is generally given to horses, but in Scotland

supports the people.

‘Lexicographer’: a writer of dictionaries: a harmless drudge, that busies himself in tracing the original, and detailing the signification of words.

- 11) 「心理受動文+by」構文を受容したことが、編者が規範主義者ではなかったということに即意味するものではない。さらに非標準的語法(たとえば, Onions がその著書の中で, Caution として扱っているような非標準語法など)の引用文の調査をしなければ, 規範主義と破格引用文の関係に関して結論を下すことができないのは当然である。

参考文献

- Baugh, Albert C. and Thomas Cable. 1957/1993⁴. *A History of the English Language* (4th ed.). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Bradley, Henry. 1904/1968. *The Making of English* (revised by Simeon Potter). London: Macmillan.
- . 1928/1993. *The Collected Papers of Henry Bradley* (facsimile reprint). Tokyo: Ogawa Tosho.
- Burchfield, Robert ed. 1972-86. *A Supplement to the Oxford English Dictionary*, 4 vols. Oxford: Clarendon Press.
- Close, R. A. 1975. *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.
- Correspondence of Robert Bridges and Henry Bradley*. 1940. Oxford: Clarendon Press
- Johnson, Samuel. 1996. *A Dictionary of the English Language (1755/1773)* on CD-ROM. Cambridge: Cambridge University Press.
- Odom, W., the Rev. 1926. *Hallamshire Worthies: Characteristics and Work of Notable Sheffield Men and Women*. Sheffield: J. W. Northend Ltd.
- OED*: Murray, J. A. H., H. Bradley, W. A. Craigie and C. T. Onions. 1933. *The Oxford English Dictionary*, 12 vols and *Supplement*. Oxford: Clarendon Press.
- OED* on CD-ROM: Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner. 1992. *The Oxford English Dictionary* on CD-ROM. Oxford: Oxford University Press.
- Onions, C. T. 1904. *An Advanced English Syntax*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Reddick, Allen. 1990/1996. *The Making of Johnson's Dictionary 1746-1773* (revised ed.). Cambridge: Cambridge University Press.

- Svartvik, Jan. 1966. *On Voice in the English Verb*. The Hague: Mouton & Co.
- Taketazu, S. 1999. "Onions and his treatment of *be surprised by* in the *OED*." *Nagasaki Prefectural University Journal*. Vol.33, No.3, pp.9-28.
- 今里智晃・土屋典生, 1984, 『英語の辞書と語源』東京：大修館書店。
- 太田朗・池谷彰・村田勇三郎, 1972, 『文法論 I』東京：大修館書店。
- 佐々木達・木原研三 (編), 1995, 『英語学人名辞典』東京：研究社。
- 中原章雄, 1999, 『「辞書のジョンソン」の成立ーボズウェル日記から伝記へー』東京：英宝社。
- 永嶋大典, 1983, 『ジョンソンの『英語辞典』：その歴史的意義』東京：大修館書店。
- 林哲郎, 1968, 『英語辞書発達史』東京：開文社。
- 松浪有・池上嘉彦・今井邦彦 (編), 1983, 『大修館英語学辞典』東京：大修館書店。
- 渡部昇一, 1975, 『英語学史』東京：大修館書店。

Appendix I OED における「心理受動文+by」構文の引用文数 (1000ページ当りの頻度)

	Murray	Bradley	Craigie	Onions
<i>alarm</i>	6 (0.83)	5 (1.09)	3 (0.93)	2 (1.43)
<i>amaze</i>	2 (0.28)	1 (0.22)	0	0
<i>amuse</i>	2	2 (0.44)	2 (0.62)	1 (0.71)
<i>annoy</i>	6	4 (0.87)	2	1
<i>astonish</i>	1 (0.14)	1	0	0
<i>bewilder</i>	3 (0.42)	2	1 (0.31)	1
<i>bother</i>	1	0	0	1
<i>chagrin</i>	1	0	0	1
<i>confuse</i>	2	1	0	1
<i>deject</i>	2	1	0	0
<i>delight</i>	0	1	0	0
<i>depress</i>	1	0	1	0
<i>disappoint</i>	2	1	2	0
<i>disgust</i>	4 (0.56)	1	2	2
<i>dismay</i>	1	0	0	0
<i>displease</i>	1	0	0	0
<i>excite</i>	2	3 (0.65)	2	0
<i>frighten</i>	5 (0.69)	10 (2.18)	2	0
<i>grieve</i>	4	3	0	0
<i>interest</i>	1	1	1	1
<i>offend</i>	3	1	0	0
<i>overwhelm</i>	0	2	0	0
<i>perplex</i>	2	0	2	1
<i>please</i>	0	3	0	1
<i>puzzle</i>	1	0	0	2
<i>satisfy</i>	2	1	1	0
<i>scare</i>	4	4	2	1
<i>shock</i>	2	1	2	0
<i>startle</i>	6	8 (1.74)	4 (1.23)	0
<i>stun</i>	2	3	1	0
<i>surprise</i>	3	8	5 (1.54)	0
<i>terrify</i>	2	1	4	0
<i>vex</i>	2	1	0	0
<i>worry</i>	0	2	1	0
total	76 (10.5)	72 (15.7)	40 (12.3)	16 (11.5)

編集ページ数

7,207

4,590

3,242

1,395

Appendix II

OED における「心理受動文+by」の引用文例 (括弧内の語は各引用文の見出し語)

alarm (16)

1716 Alarmed by an experience of the baseness, and the exceptiousness of men (*exceptious*); 1791 They were alarmed by the tramping of horses near the abbey (*tramp*, v.); 1800 The people of the vale had been a good deal alarmed by the appearance of that unaccountable being water-horse (*water-horse*); 1851 You will not be alarmed by my use of pruning-knife (*pruning-knife*); etc.

amaze (3)

1667 'tis easie to discern how much he must be distracted and amazed by them (*tremulous*); 1850 I started first, as some Arcadian, Amazed by goatly God in twilight grove (*goatly*); 1876 You are amazed by the profusion which is characteristic of Nature (*profusion*).

amuse (7)

1774 He then placed them in a cage at his chamber window, to be amused by their sportive flutterings (*sportive*); 1816 Emma would have been amused by its variations (*wavering*); 1858 Amused by a couple of rams butting at each other (*butt* v.); 1879 You would be screamingly amused by one (*screaming*); etc.

annoy (13)

1834 Sadly annoyed he is sometimes by her malapropisms (*malapropism*); 1839 The men ... were evidently annoyed by my success (*squint-eye*); 1844 My reception has been so large, that I am not annoyed by receiving this or that superabundantly (*superabundantly*); 1876 Washington was annoyed by shoals of selfish importuners (*importuner*); 1885 We have been greatly annoyed of late by a lot of tin horn gamblers and prostitutes (*tinhorn*); etc.

astonish (2)

1876 Astonished by an invitation to dinner, which she denies (*card*); 1883 Never was more astonished than by Lady Arabella's gaucheness (*gaucheness*).

bewilder (7)

1751 I was bewildered by an unseasonable interrogatory (*interrogatory*); 1837 Bewildered by long terror, perturbations and guillotinement (*guillotine* v.); 1855 Bewildered by his own skillful word-juggling (*word* n.); 1909 The chorus-singers seemed a little bewildered by his batonless movements (*batonless*); etc.

bother (2)

1846 I really am bothered by this confounded dramatization of the Christmas books (*dramatization*); 1923 If you are particularly bothered by the proximity of

wires (*capacity*).

chagrin (2)

1928 Mr. Churchill was deeply chagrined by being compelled to withdraw his proposed kerosene tax (*kerosene*); etc.

confuse (4)

1711 she was perfectly confused by meeting something so wistful in all she encountered (*wistful*); 1822 This man being confused by the perverseness of all (*perverseness*); 1857 We were soon confused by numerous logging-paths (*logging*); etc.

deject (3)

1638 Yet in the meridian of his hopes [he] is dejected by valiant Rustang (*meridian*, n.); 1712 we should take delight in being terrified or dejected by a Description (*pass*, n.); etc.

delight (1)

1796 I am extremely delighted by the attentive perusal of musico-philosophical letters (*musico-*).

depress (2)

1844 Had he allowed himself to be depressed by every unpleasantness (*unpleasantness*); etc.

disappoint (5)

1648 [You] might have found yourself as sensibly disappointed by her Grant (*grant*, n); 1688 Greatly disappointed by this loss [of a horse] (*team*, n); 1880 They were wofully disappointed by the results of their intended sociability (*sociability*); etc.

disgust (9)

1794 Emily was disgusted by the subservient manners of many persons (*subservient*); 1840 Very much disgusted by Mr. Elton walking out in the last scene (*walk*, v.); 1852 men must not be disgusted by occasional exhibitions of political harlequinism (*harlequinism*); etc.

dismay (1)

1854 Somewhat dismayed by this specimen of barrack-life (*barrack*).

displease (1)

1822 I was so displeased by the jocularities of the bailie (*jokery*).

excite (7)

1823 Excited, as he said, by the drollness of the scene (*droll*, a.); 1858 Excited by the waggery of his more intellectual neighbors (*waggery*); 1872 The Dutch were not excited by those visions of American gold and silver (*vision*, n.); etc.

frighten (17)

1794 If he supposes I am to be frightened by his pompous accusations, he has much mistaken his man (*mistake*, v.); 1821 I am not to be frightened by fee, faw, fum (*fee-faw-fum*); 1856 he was frightened by her denunciations (*denunciation*); 1879 Let not women be frightened by the scaring name (*scaring*); 1884 I am not at all frightened by the word 'sectarian' (*sectarian*); etc.

grieve (8)

1775 By lack whereof they have been oftentimes touched and grieved by subsidies given (*lack* n.); 1802 I am more grieved than I can express by a cruel contre-temps (*contretemps*); 1899 Lovers of old London have been grieved by the news that... (*knacker*, n.); etc.

interest (4)

1830 I have been gratified and interested by going over one of the largest manufactories of this place (*go*, v.); 1861 Albinia had been strongly interested by the touching facts (*untouchingly*); etc.

offend (4)

1829 He dared not contest obstinately against persons of quality, who would be offended by his discourse (*contest* v.); 1830 I myself am offended by the obtrusion of the new lections into the text (*lection*); 1842 The Tartars call themselves Turks, and feel highly offended by being called Tartars (*Tartar*); etc.

overwhelm (2)

1849 Clarendon was overwhelmed by manifold vexations (*manifold*); 1866 Not only was I myself overwhelmed by these accounts of foreign travel (*we, pro*).

perplex (5)

1770 Perplexed by sophistries, their honest eloquence rises into action (*sophistry*); 1869 Perplexed for a moment by the suddenness of the tidings (*tidings*); 1871 A young person is perplexed by the dissential judgments (*dissential*); etc.

please (4)

1855 His haughty spirit could not be pleased by the subordinate part (*subordinate*); 1859 Much excited and pleased by your accounts of your daughter's engagement (*engagement*); etc.

puzzle (3)

1891 a German physician coming to this country became puzzled by the variety of nervous disorders (*American*); 1928 There is no anti-Britishism here, but I am puzzled by the objection to our being pro-American (*anti-British*); etc.

satisfy (5)

a1631 we are sufficiently cleared and satisfied by the Authority of the Holy Spirit of God (*clear* v.); 1663 I was thereby much satisfied and confirmed by his uptaking of the nature and notion of faith (*uptaking*); 1701 When a lover becomes satisfied by small compliances without further pursuits (*pursuit*); etc.

scare (11)

1756 I will not be scared out of my senses by improbabilities and maybe's (*maybe*); 1817 Scared by the faith they feigned (*priestly*); 1845 We are not scared by all this towering indignance (*indignance*); 1855 It is difficult to believe that a Prince would have been scared by so silly a hoax (*hoax*); 1901 I was oppressed and scared by the far-reachingness (*far-reaching*); etc.

shock (5)

1851 Were Peter Damian still upon earth, To be shocked by such godly mirth (*ungodly*); 1881 It has never occurred to him that people would be shocked by seeing him 'tout' at Albany (*tout*, v); etc.

startle (18)

1854 I was startled by the loud honking of a goose (*honk*, v.); 1854 I was startled by something descending, with a great flop, on to my hat (*flop*, n.); 1856 He was startled by the growing weakness of the ice (*weakness*); 1865 I have been startled by hearing it urged in sober earnest (*sober*, a.); 1873 They were startled by an exclamation from Ingran (*exclamation*); etc.

stun (6)

1786 Stunned by their gibbering (*gibbering*); 1856 Perfectly be stunned by those insufferable cicale (*cicala*); 1865 He is only stunned by the unvanquishable difficulty of his existence (*unvanquishable*); etc.

surprise (16)

1786 At the desert I was very agreeably surprised by the entrance of Sir Richard Jebb, who stayed coffee (*stay*, v.); 1838 Miss Merton was surprised by the beauty of the young fairy before her (*fairy* n.); 1845 I was a good deal surprised by finding two species of coral, possessed the power of stinging (*sting*, v.); etc.

terrify (7)

1658 When thy are most terrified and huspil'd by these Ghosts (*huspil*, -el, v.); 1712 we should take delight in being terrified or dejected by a Description (*pass*, n.); 1897 A person had been terrified by hearing the curtains of the bed rustle (*rustle*, v); etc.

vex (2)

1748 We are to live on at this rate (are we?) vexed by you, and continually watchful about you (*watchful*); 1890 His order-loving soul was daily vexed by

reason of the irregularities (*order*, n.).

worry (3)

1869 Young Mr. Blucher was a good deal worried by the constantly changing 'ship time' (*ship*, n.); etc.